

Faulkner における“眼”

森 田 孟

(一)

我々は、William Faulkner の最大傑作と見做されている *The Sound and the Fury* (SF と略す。他の作品の場合もこれに倣う) を読み進めてゆくと、読了真近になって、いきなり活字の間から片眼に睨まれてびっくりする (327)⁽¹⁾。駅の片隅に Keep your eye on Mottson という電気広告が立っており、そこには文字の間に眼が描かれていて、それが電気で点滅する仕掛けになっていたわけであるが、その眼が、作中でも実際に、活字の間に絵として描かれているのである。この作品読了後の深々とした感動の合間合間にも (と言っても、周知のように、この作品を初めて一読しただけでは、読者はその感動を充分味わうわけにはゆかないのであるが) この“眼”は、奇妙に我々の印象に生ま生ましいのである。一体、この“眼”には、如何なる意味があるのだろうか。それとも、その意味などを考え始めるのは、Faulkner の思う壺に嵌まることになるのであって、これは単に、彼の気紛れな茶目っ気の現われにすぎないのであろうか。ここで我々は、すぐに思い出すであろう。それは例えば、*As I Lay Dying* (AILD) の Tull の三度目の独白の中で、「Cash はお棺をこんな風に柱時計の形に作って、継ぎ目や合わせ目を鉋で削って斜角を付け……」(400)⁽²⁾ という一節と共に、その文中に挿入してある、柱時計を寝かせた形の六角形である。或いは、同じ作品の中の Addie の独白中に、「私の身体の形は、処女だった頃のところは今では の形になっており……」(465) とある一語分の空白である。いずれも我々の視覚に直接訴えているわけである。更に *Pylon* ⁽³⁾ (P)

の中では、新聞記者のポケットから食み出している新聞紙上に読めるだけの文字を、ゴチック体で提示してあり、眼に見えるだけの活字を同じようにして数箇所散在させてある。思い返せば Faulkner には、直接、視覚に訴えようとする種々の試みがあった。音声さえ、眼に訴えようとする。例えば *Light in August* (LA) では、McEachern の怒声を示すのに、活字の大きさの変化を利用している (155)⁽⁴⁾ し、Hightower の妻が彼の興奮を静める声は、*Shhhhhhh! Shhhhhhhhh!* (425) と何度も、文字で示される。*Sanctuary* (S) では、恐怖に駆られる Temple の声が

her voice making a thin eeeeeeeeeeee sound like bubbles in a bottle.
(118)⁽⁵⁾

と示されている。類似の試みは SF においても、数回なされている。夜の闇の中を犬を呼ぶ声は

WhoOoooo. WhoOoooo, WhoOoooooooooooooooooooo. (134)

ヤーという声は

Yahhhhh, Yahhhhh, Yaaahhhhhhhhh. (259)

教会で熱狂的な牧師の説教を聞いて感動する女性達の声は、三回表示されている (311-312) が Mmm...m! と m を、最初は12箇所、次は15箇所、三番目は12箇所並べてある。このような「直接法」は、P では、新聞記者がデスクに報告する電話での話の内容は、三分間かかったと述べられているものは、実際に話してみると確かに三分間かかるように配慮されていることなどにまで徹底しているのである。

詩は現代においても尚依然として、耳から「読む」ことも盛んになされているが、小説はまず専ら、眼で読むしかない文字の芸術である。Faulkner は文字を、特に酷使した作家と言ってよいであろう。彼の作品は終始、普通の活字とイタリック体との使用によっており、ゴチック体さえ使用している。SF の Benjy の部など、多色刷で活字が組まれることが許されたなら、どの位、我々

の理解は容易になったことであろうか。そして Faulkner は、それをやりかねなかった作家であることは、以上の例を見ただけでも想像がつくところである。

確かに物体の形状などは、如何なる文章表現によるよりも、その形そのものを、絵なり写真なりで示すほうが、communication は確実であろう。しかし、我々の想像力発動の幅は制限されることになる。あの“眼”を絵で見せられた以上、我々に、右眼を想像することはできなくなるし（絵は、左眼だと見做される）、極端なドングリ眼も、三カ月眼も、思い描くわけにはいかない。柱時計の形と言われたら種々に想像できる形状も、絵によって一つに限定されるわけである。文学は作家の想像力と読者の想像力との絡み合いによって成立する芸術現象である。とりわけ読者の想像力を強烈に要請している Faulkner の文学に、それを制限するような要素があることは面白い。相対立する要素、反対方向の要素が併存するのが、Faulkner 文学の重要な特色であることを思い出したい。文字により我々の眼を通して想像力に働きかける、言わば「間接」の芸術である文学において、直接、視覚に訴える要素は、多少なりとも我々の想像の余地を限定すると思われるのであるが、この点で殊に興味深いのは、Addie の独白に見られる「空白」である。あの一語分の空白は、紛れもなく、Cash の作る棺の形状や、広告文の中の眼の絵と同様に、明確に、直接に、我々の視覚に訴える「形体」であるが、あの一語分の空白ほど、我々の想像力を強烈に刺戟し、誘発する形体はないと言えるだろうからである。処女の頃の身体の形が、結婚して五人の子供を生み、臨終の床にある現在、このように変わってしまっていると言うのであるから、一体、何を指しているのであるか、如何なる形になっていると言うのであるか、と、我々の想像は種々に躍動させられるのである。直接、視覚に明確に訴えながら、しかも同時に、想像力も充分に発揮させる例として、注目してよいと思われるのである⁽⁶⁾。

さて、もはや SF における“眼”の絵は、単なる気紛れでないことは明確であるが、それにしても、何も眼でなくても、絵で示すものは他にもあると思われるのに、何故、眼の絵だけが、最後に近くなって文中に挿入されているのだ

ろうか。

Benjy は周知のように白痴である。従って思考力はないのであるが、その代りと言ってよい程に鋭い感覚を持っている。彼は専ら、眼で見、耳で聞き、鼻で匂いを嗅ぐのである。彼の内的意識が提示されている第一部は、単純な sentence が多いが、誰それがこう言った (said)——つまり Benjy の聴覚が働いているわけである——とか、誰それがこうした、ああした、という動作を表わす文章——つまり彼の視覚が働いているわけである——や、Caddy は木の匂いがした、Quentin は雨の匂いがした、といった、彼の嗅覚を表わす文章が大半で、see, look at, watch, hear, feel, smell など、感覚動詞や say が多いことが特徴になっている。大体、雨などというものは音を立てるものであっても、普通、匂いのするものではない。その雨を、しかも、直接に雨の匂いを嗅ぎとれるばかりか、Quentin は雨のような匂いがした、と微妙な嗅覚の働く Benjy に我々は、嗅覚の異常な鋭さを圧倒的に感ずるかも知れないが、彼の眼は思いの他に鋭いのである。一方 Quentin は、白痴どころか、Harvard 大学の学生になる頭脳を持ちながら Benjy とは逆に、眼の曇った、眼の「見えない」青年で、彼は結局、現実を明確に見ることができずに、白昼夢を見ているような状態の一日を過ぎた挙句、自殺することになる。一見、最も醒めた意識を持ち、合理的思考力を持っているように見える Jason も、実は甚だ歪んだ思考・感情しか持ち合わせず、現実を正確に見ることができない点では、Quentin に少しも劣らず、Appendix に述べられた「最初の、そして最後の正気な Compson」(16) という言葉が、強烈な irony として響く程、狂気である。彼らの父母も、共に眼の「見えない」人達である。現実を正確に見ることが出来る醒めた眼を、どちらか一人でも持っていたならば、子供達はあれ程不幸にはならなかったであろうし、Compson 家も崩壊はしなかった筈である。Compson 家を失踪する不幸な娘 Caddy は、眼ざめた故に、白痴の弟と黒人の召使い女 Dilsey 以外には、眼の曇った人物ばかりである一家に居たたまれなかったのであった。幼年時代に Caddy の登る樹が、Compson 家の庭にあ

る。これは父が、子供達に、登るなと戒めていた樹であるが、これについては Melvin Backman が、Faulkner は Caddy の泥で汚れた下着を Satan と the forbidden tree in Eden とに結びつけているかのようであり、又、Caddy の汚れを original sin に結びつけているかのようだ、と述べ、更に、Caddy は Benjy にとっては the tree of life であったのに、Quentin にとっては the fatal tree of knowledge ということになるろう、と述べている⁽⁷⁾。この樹はリンゴの樹ではなく梨の樹であった(298)が、この樹の近くには蛇も姿を現わしており(56)、Backman の指摘は卓抜であると思われる(もっとも、Bible に慣れ親しんでいる国民にとっては容易に気付くことであろう)。幼年時代にただ一人、この樹に登った Caddy は早く性に眼ざめ、愛に生きてゆくことになる。人生に眼ざめて、苦難に満ちた生活ながら、最も人間らしい生き方をしてゆく Caddy にとって、この樹は、まさに「開眼」をもたらす「知恵の樹」であった。不幸にして白痴に生まれつきはしたが、醒めた眼を持っていた Benjy にとっては、「開眼」した、或いは「開眼」する可能性を持っていた Caddy は「生命の樹」であり得たが、Quentin にとっては彼女は、「宿命的」な「知恵の樹」になったのである。Quentin は結局、眼醒めることができなかったのだから。なお、情熱的に愛に生きる自然な、人間的な女性となる Caddy に対し、Quentin は倒錯的な性しか生きられず(妹に対する近親相姦を夢想したりする)、Jason は Jason で、娼婦とは交渉を持っても、結婚することはしない不自然な男で、人を愛することを知らず、Benjy はまた、その Jason によって去勢されてしまう、ということにも注意しておきたい。Jason の、Quentin との同質性、及び、Caddy や Benjy との異質性が判るであろう。Caddy 失踪の Compson 家において唯一人、Benjy に愛情を注ぎつつ一家の崩壊をかうじて支える Dilsey も、眼の「見える」人物である。彼女は Benjy をつれて教会に祈りに行くが、はらはらと止めどもなく落涙しながら、「私は、最初と最後を見てしまった」と何度も口に出すのである。

“I’ve seed de first en de last,” Dilsey said. “Never you mind me.”

“First en last whut?” Frony said.

“Never you mind,” Dilsey said. “I seed de beginnin, en now I sees de endin.” (SF. 313)

“...Ise seed de first en de last,” she said, looking at the cold stove, “I seed de first en de last.” (SF. 316)

何の「最初と最後」なのか、Dilsey は娘に聞かれても明らかにしはしないが、その同じものは、Benjy にもおそらく見えていたのではなからうか。召使いではなく、又、白痴ではない、真に正常な Compson 家の一員が、もっと早く、「見」ていなければならないものだったのであろう。そうすれば、一家の崩壊は免れ得たのではなかったか。Dilsey の頬を滴り落ちる熱い涙と共に、Compson 家は実際上崩壊し、この作品も終るのである。Dilsey の言葉のすぐ後で、我々は件の“眼”に出合うことになる。

もはや贅言は要しまい。Compson 家に必要だったのは、眼——醒めたる眼、であったのだ。この作品にあって、文中に絵として挿入されて我々の眼に直接訴えられなければならないものがあるとすれば、それはまさに、眼をおいては他にあり得なかったのである。そしてその“眼”は、Disley の言葉の後に提示されねばならなかったことが、以上で判明しよう。

(二)

感覚の鈍い作家など有り得ないが、Faulkner は、その感覚によって、殊に、異常なまでに読者の感覚を動員する作家である。我々は彼の世界に入り込むと忽ち、感覚が研ぎ澄まされるのを感じないではられない。作中人物の鋭い嗅覚は、例えば Benjy のように、我々にも雨の匂いを嗅がせたり、病気の匂い、水の匂いを感じ取らせたりする。老嬢の女体の匂いに思わず眉を顰めたり ((*Absalom, Absalom!* (AA)⁽⁸⁾ の Rosa 参照)、動植物の、例えば Verbena の匂いに種々の意味を考えさせられたり ((*The Unvanquished* (U)⁽⁹⁾ の最終章、

“An Odor of Verbena” を参照) する。かと思うと、例えば、絶えず追いかけてくるような、棺を作るノコギリの音に耳を刺戟され続け (AILD), “Carry on, Joe!” と、八回にも互って繰り返される Donald の声に、その度に聴覚が緊張し ((*Soldiers' Pay* (SP)⁽¹⁰⁾), 「父によれば」, 「悪魔が」などという合いの手が、いつの間にか我々を重々しい rhythm に乗せてゆく (AA)。或いは我々は、愛撫する青年と共に掌に、及び、愛撫される女性と共に体表面に、奇妙な触覚を感じさせられ (例えば LA の Joe と Bobby 参照), 或いは、ピントの美しい練り歯磨きの味を、幼年の Joe と共に味わい (LA), 吐く人物 (Faulkner の世界には多く見当る。新しい状況に適應できない時 vomit する人が多い) と共に嘔吐感を催す (LA, S, U など)。五感はもとより、第六感まで働かせられるのであるが——何故ならさもないと、理解できなかつたり鑑賞できない作品が少なくないから——やはり、視覚が最も強力に働かせられるのは無理もないであろう。読み難い sentence を眼で追わせられるのだから。Faulkner の文学には、煩わしい程比喻が多いのであるが——彼の比喻一般については稿を改めたいが——中でも、視覚に訴える simile が多いことが注目される。そのため、絢爛たる imagery に溢れた世界となるわけである。

さて、彼の作品で見逃せないことの一つは、眼の描写や、眼の比喻が多いことであり、その果たしている少なからぬ文学的役割である。以下、それを検討してみたい。

Faulkner の処女作 *Soldiers' Pay* は、開巻冒頭、一人の帰還兵が、黄色い不機嫌な眼でこの世を眺めた、という次の sentence で始まる。

Lowe, Julian, ... regarded the world with a yellow and disgruntled eye. (SP. 7)

この作品は、何らかの形で“眼”が、Faulkner の作品中最も多く出てくるもので、約130 余箇所を数えることが出来る。黄色い眼は、Jones という得体の知れない好色な人物に徹底して使われている。

- ① Jones' eyes were clear and yellow, obscene and old in sin as a goat's. (SP. 47)
- ② Jones' goat's eyes immersed her in yellow contemplation. (SP. 49)
- ③ ... his unblinking goat's eyes... (SP. 56) / ... his yellow unwinking eyes—like a goat's. (SP. 58)
- ④ ... his clear obscene eyes showed no emotion. (SP. 62)
- ⑤ Jones' yellow eyes, unabashed, ... (SP. 93)
- ⑥ ... his yellow eyes expressionless as a dead man's. (SP. 93)
- ⑦ Jones' yellow idol's stare remarked her body's articulation... (SP. 151)
- ⑧ Jones' stare was calm, bold and contemplative, obscene as a goat's. (SP. 155)
- ⑨ His yellow eyes washed over her warm and clear as urine, ... (SP. 157)
- ⑩ His yellow goat's eyes became empty... (SP. 204)

上例中“his”は、全て Jones を指す。表現法や形容詞や、動詞など、少しでも変化のある主なものを拾っただけであるが、山羊の眼のような黄色い好色な眼であることで一貫している。この「黄色」は Jones に対しては実に徹底して使われている。

Jones ... became yellowly speculative: tactical; (SP. 140) / Jones stood ... yellowly watching her ... (SP. 141) / Jones ... yellowly repeated. (SP. 144)

Jones は Catholic の孤児院で成長したのであり (SP. 160), 生まれや性向の点でトルコ人みたいであり, 東洋人的にもなっている (SP. 196). 彼は Cecily の眼には次のように映る。

The feminine predominated so in him, and the rest of him was feline: a woman with a man's body and a cat's nature. (SP. 154)

また、彼女は、彼があんなに肥っていなければ、眼の色がもう少しなんとか他の色ならまだいいのだが、と考える (SP. 155). Margaret は、彼から次のような印象を受ける。

She got of him an impression of aped intelligence imposed on an innate viciousness; the cat that walks by himself. (SP. 171)

Julian もすぐに、どの女性でも好きになる軽薄な若者であるが、*The Wild Palms* (WP)⁽¹¹⁾ の Charlotte の眼も黄色であり、彼女は、性愛に熱中し、夫や子供を棄てる女性である。「黄色」に付されている nuance が我々に感じ取れるが、Charlotte は Jones のような悪役ではない。

- ⑪ ... with queer hard yellow eyes. (WP. 8)
- ⑫ her eyes were not hazel but yellow, like a cat's, staring at him with a speculative sobriety like a man might, intent beyond mere boldness, speculative beyond any staring. (WP. 26)
- ⑬ ... her yellow eyes like a cat's in the dark, not triumph or exultation but rather fierce affirmation... (WP. 45)
- ⑭ ... the unwinking yellow stare in which he seemed to blunder and fumble like a moth, a rabbit, caught in the glare of a torch; (WP. 45)

⑪は医者の眼に映る Charlotte の眼、⑫は初めて会った時 Harry の眼に映る彼女の眼、⑬、⑭は、彼女が塑像の制作で収入を得た時の彼女の眼である。彼女の性格や、その時々の意志や感情も共に表現しているわけである。他に如何なる色の眼があるだろうか。

- ⑮ Her eyes became dark blue. (SP. 149) / Her eyes were quite green again. (SP. 149) / Her eyes became blue with anger, almost black. (SP. 92) / Her eyes grew blue again with foreboding. (SP. 61)
- ⑯ Her eyes were black and they became quite gentle as she said: (SP. 111)
- ⑰ ... the hot brown eyes... (P. 7) / ... his hot bright eyes... (P. 73)
- ⑱ ... hard bright grey eyes, (U. 34)
- ⑲ ... his eyes a little red at the inner corner as Negroes' eyes get when they have been drinking... (U. 4)
- ⑳ They [eyes] were a kind of thin milk color, like the chine knucklebone in a ham. (U. 161)

⑮はいずれも Cecily の眼であるが、同じように眼が blue になる場合にも、

理由は種々にあるわけである。⑮は Margaret の眼，⑯は、店員の眼に映る Jiggs の眼と、新聞記者の眼である。⑰は子供達を庇っている Granny を見詰める北軍の大佐の眼，⑱は子供達の遊びを冷淡に見詰める Loosh の眼である。⑳は驃馬を取り戻しに Sartoris 家に来た北軍の中尉の眼で、彼は驃馬をも見ており、“like” 以下もその場の状景に縁のある比喻である。milk 色をした眼は他にも見当る。Ruby の赤んぼうの眼である。

Its eyes were half open, the balls rolled back into the skull so that only the white showed, in color like weak milk. (S. 192)

その他の眼の色を例だけ簡単に挙げておこう。

...a little red-eyed with weariness... (U. 248) / ...strain-reddened eyes (U. 250) / ...mud-colored eyes... (S. 223) / ...black eyes... (S. 319) / ...bone-white eyes..., ...white eyes (共に AILD. 476) / black and lightless eyes... (SP. 164) / eyes of a bright dark hazel (AA. 65)

以上の例からも窺えるように、眼の色と言っても単純ではなく、種々の形容語句が付いている場合が少なくない。眼に如何なる形容がなされているだろうか。Jones の「山羊のような」という形容は、他の作品にも例がある。

㉑ His eyes were clear and cold, like a goat's. (SF. 161-162)

幼女誘拐の容疑で Quentin を取り調べる地方判事の眼である。Faulkner は種々の動物を比喻として頻用するが（例えば、She began to run like a deer, ... (U. 226) / ... the girl sailed across the room like a bat. (SP. 190-191) のように）眼にも色々見られ、山羊の他にも猫は多く使われる。⑲の「暗闇の中で光る猫の眼のように」以外にも次のようなものがある。

㉒ ... his eyes were bright as a cat's. (U. 76)

㉓ Tommy's pale eyes began to glow faintly, like those of a cat. (S. 91)

㉒は John Sartoris が、夜陰に乗じて少人数で北軍の一隊を捕虜にする時の眼，㉓は Temple の寝ている部屋へ、Popeye の後をつけてそっと入る時の Tommy の眼である。暗闇と秘かな行動と関係があるのは、まさに猫の眼。

た。その他の動物をみてみよう。

- ⑳ He glanced at her quickly, like a struck dog. (SP. 36)
 ㉑ ... I saw his eyes roll red and unwinking in his skull like those of a cornered fox. (U. 277-78)
 ㉒ ... his eyes had a reddish look, like a fox's. (R. 54)⁽¹²⁾
 ㉓ Yaphank's eye was like a snake's. (SP. 14)
 ㉔ ... Young Robert, ... caught Jones' yellow fathomless eye, like a snake's. (SP. 152)
 ㉕ ... with his watery fierce eyes like the eyes of an old hawk, ... (U. 58)
 ㉖ They held their breath, closing their eyes like ostriches ... (SP. 165)
 ㉗ That's how I ruined my eyes watering the elephant's fleas. (SF. 112)
 ㉘ ... watching the hurried staring twin eyes of motor cars like restless insects. (SP. 190)
 ㉙ His eyes were like two oysters. (SP. 28)
 ㉚ Her eyes flew like birds ... (SP. 63)
 ㉛ ... man with eyes like two bluebird feathers moulted on a small lump of coal, ... (R. 26)

㉔は Margaret に「あなたも独軍飛行機に出合っていたら空の勇士になれたでしょうに」と言われて悄気た時の Lowe の眼付き、㉕は John の死体の側に付き添っている Simon の眼で、複雑な緊迫感をよく伝えている。㉖は狡猾だが、憎めない humor を発揮する黒人ネッドの眼、㉗は Joe Gilligan の眼、㉘は Cecily の弟が Jones の眼を窺い見る時の眼、㉙は Bayard 少年を目の前において、その父の John 大佐のことを南軍の一大尉に興奮して話して聞かせる Uncle Buck の眼、㉚は Cecily の恋人 George Farr と Jones とが、とっ組み合いを演じている時の眼。二人はそれぞれ、庭の繁みなどに身を潜めたりもするのであるが、「頭隠して尻隠さず」というような点が見えることも面白い。㉛は Herbert と話をしていた時のことを Quentin が思い出しているのである。㉜は Margaret が夜の庭を眺めているのである。なお、車の head light が眼に喩えられており、これは、眼が比喩に使われている例でもある。他には、次のような、闇の中の cigarettes の火を眼に喩えている

例も見られる。

Along the balustrade of the veranda red eyes of cigarettes glowed;
(SP. 133)

㉓は Julian Lowe の眼、彼の眼はぬるぬるしてして生臭くもあるものとみえる。㉔は軽薄な Cecily の眼、㉕は Sartoris 大佐に車を売りつけた Buffaloe という名の男の眼である。

植物はどうであろうか。

㉖...unwinking eyes like two currants floating motionless in a cup of weak coffee...(SF. 144)

㉗ Uncle Bud watched with round cornflower eyes as they took one each. (S. 302)

㉘ His eyes were clear, of the pale sweet blue of cornflowers...(SF. 290)

㉙...a dreamy myopic gentian-eyes (R. 25)

㉚は Quentin の眼に映る、パンを見詰める幼女の眼で、菓子屋の前というその場の情景と縁のある比喻であると同時に、floating, motionless など、水死する決心の Quentin の脳裡には当然浮かびそうな語句ではないか。㉛は酒に興味のある悪童の Uncle Bud が、Miss Reba 宅で母親達が酒を飲むのを見詰める眼。㉜は Benjy の眼である。涎を流し、飼い慣らされた熊みたいに (like a trained bear) 歩く大男の彼も、「矢車菊の快い淡青色の澄んだ眼」とは、何と美しい眼を持っていることか。彼の眼は、曇りのない、よく「見える」眼なのである。他にも...rapt in his blue gaze(SF. 313),...his eyes serene and ineffable (SF. 334),...his eyes were empty and blue and serene (SF. 336) などと描写されている。㉝は Buffaloe の眼である。

鉱物も眼の比喻には色々使われている。

㉞ Jones' yellow stare enveloped her like amber, remarking her sun-burned hair...(SP. 206)

㉟...with a pair of eyes like two topazes...(P. 52)

- ④② ... her sharp stare was like ice water. (SP. 52)
 ④③ Her gaze was remote and impersonal, green and coal as sea water ... (SP. 53)
 ④④ Her eyes were unfathomable as sea water. (SP. 99)
 ④⑤ ... her green blue eyes took him sweetly as water. (SP. 54)
 ④⑥ Her eyes, lost in the fatty ridges of her face, looked like two small pieces of coal pressed into a lump of dough ... (*Collected Stories*, vol. 2, Chatto & Windus ed. P. 11)
 ④⑦ ... with eyes like (as you might put it) pieces of coal pressed into soft dough ... (AA. 65)
 ④⑧ ... the brilliant incredulous eyes looking at me out of the laughter as if they belonged to somebody else, as if they were two inert fragments of tar or coal lying on the bottom of a receptacle filled with turmoil: (U. 281)
 ④⑨ He sat glassy-eyed among fried smells ... (SP. 186)

④⑩ は Donald の死を悲しむ Emily を卑劣な心情の裡に眺める Jones の眼。
 ④⑪ は新聞記者の奇妙な名前 (Jesus Christ に似た名前らしいのであるが) を聞いている男の眼。④②, ④③ は Jones を見る時の Cecily の眼。④④ は父に思いがけなく厳しい態度に出られた時の Cecily の眼。④⑤ は Jones を相手にしている時の Cecily の眼。④⑥ は Faulkner の短篇中最も有名な “A Rose for Emily” の主人公 Emily が、訪ねて来て要件を述べている市の代表者達を眺め回している時の眼。彼女は三十代の頃、薬局に毒薬を買いにいった時には次のような眼をしていた。

... with cold, haughty black eyes in a face ... (15)

④⑦ は Quentin が父から聞く、昔の Miss Rosa の眼である。彼女は、④③ の Miss Emily と、性格、雰囲気等においてよく似ているのであるが、二人の眼に付された形容——それも一度ずつしか使われていない——の酷似に注意したい。なお、④⑤ も coal が比喻の一部に使用されている。④⑧ は Bayard の決心——旧南部の code に従った復讐などはしないという——を覚って、ヒステリックに笑いころげる Drusilla の眼。彼女にも Miss Rosa や Miss Emily

と些か似た点が見られる。④⑨は酔っている George Farr の眼である。

色々な物体が、眼を描写するのに比喻として用いられている。例えば「磁器のような眼」がある。

⑤⑩ Fonzo was watching him, his blue eyes like china. (S. 227)

⑤⑪ ... the eyes looked like pieces of china. (P. 17)

⑤⑫ ... with ... pale, china-colored outraged eyes ... (WP. 151)

⑤⑩ は田舎出の純朴な青年が仲間を一寸疑い深く見る眼。⑤⑪ は不思議な女性 Laverne の眼。⑤⑫ は若い背の高いほうの囚人の眼。いずれも疑うような不満な感情を示している時の眼である。「眼を皿のように」とは、日本語の cliché だが、Faulkner にもある。

⑤⑬ ... with his blind eye looking big as a plate ... (U. 77)

⑤⑭ Jewel looks at me. His eyes look like pieces of a broken plate.
(A.I.L.D. 427)

⑤⑮ ... his eyes looked like pieces of a broken plate ... (AA. 45)

⑤⑯ は Ringo の片眼の乗馬の眼。⑤⑰ は Tull の眼に映る Jewel の眼である。⑤⑱ は Thomas Sutpen の眼である。Compson 氏が、父から聞いた話を、息子の Quentin に話し聞かせる。Sutpen は人々に話しかける前も次のような眼をしている。

those eyes hard and pale and reckless and probably quizzical and maybe contemptuous even then. (AA. 45)

次は、町へやってきたばかりの頃の Sutpen の眼である。

... his pale eyes had a quality at once visionary and alert, ruthless and reposed in a face ... (AA. 33)

眼が彼の性格を十二分に物語っているのが見られよう。

眼を丸い物に喩えても珍しくはなからうが、Faulkner は bead, marble, knob, button, electric bulb, wheal, egg などに喩えて特色がある。

⑤⑲ From their curled shapeless faces bead-like eyes glared with choleric

- ferocity, ... (S. 175)
- ⑤7 ... its eyes roll in the dusk like marbles on a gaudy velvet cloth ... (AILD. 472)
- ⑤8 Jewel's eyes look like marbles (AILD. 409)
- ⑤9 Jewel ... looking at Anse with them marbles eyes of hisn. (AILD. 478)
- ⑥0 ... she believed that he had no eyes at all, for between the lids two objects like dirty yellowish clay marbles were fixed. (S. 50)
- ⑥1 Popeye appeared to contemplate him with two knobs of soft black rubber. (S. 2)
- ⑥2 Popeye's eyes looked like rubber knobs, like they'd give to the touch and then recover with the whorled smudge of the thumb on them. (S. 4)
- ⑥3 ... his eyes looked like door knobs ... (U. 28)
- ⑥4 ... with Denny's eyes round as doorknobs (U. 236)
- ⑥5 ... watching you with eyes like two shoe buttons buried in the myriad wrinkles of her coffee-colored face, ... (AA. 214)
- ⑥6 ... its eyes glowed suddenly like two tiny electric bulbs ... (S. 111)
- ⑥7 ... with his eyes open and quiet and profoundly empty—that vision without contact yet with mind or thought, like two dead electric bulbs set into his skull. (P. 75)
- ⑥8 Tommy's eyes glowed again, the pale irises appearing for an instant to spin on the pupils like tiny wheels. (S. 119)
- ⑥9 Behind the glasses his eyes looked like little bicycle wheels at dizzy speed: a metallic hazel. (S. 179)
- ⑦0 Gilligan sat ... , focusing his eyes with an effort, having those instruments of vision evade him, slimy as broken eggs. (SP. 29)
- ⑦1 ... his eyes like two eggs, ... (U. 66)

⑤⑥は Miss Reba の犬の眼。⑤⑦は Jewel が馬の顔をたたいた時のその馬の眼。Darl の眼にそのように映るのである。⑤⑧は幼い Vardaman の眼に映る兄の眼。⑤⑨は Armstid の眼に映る Jewel の眼。⑥⑩は Temple の観察になる Lee の老父の眼。彼の両眼は異様な外観を持っているが ((... his cataracted eyes looked like two clots of phlegm (S. 12))) Temple にとっては彼の

眼の印象は強烈だったらしく、この眼は、彼女が Popeye に凌辱される際の幻影となる (S. 122). ⑥①, ⑥② は機械的・非人間的な Popeye が眼によっても表わされているわけであろう。なお、押し込まれた親指のような眼という比喻は、Benjy に、自分の行為を感づかれて非難される時の Caddy の眼にもなされている。... her eyes like thumbs dug into it... (SF. 143). ⑥③ は Ringo の恐怖の眼。⑥④ は Sartoris 大佐が Burden 家の二人を射殺した報をもたらす時の少年の眼。⑥⑤ は Shreve が要約してみせる Clytie の眼。⑥⑥ は恐怖に駆られて納屋に潜んでいる Temple の眼に、鼠の眼が光ってみえるのである。更にこの鼠の眼は次のように生き生きと表現されもする。

... the rat's eyes glowing and fading as though worked by lungs. (S. 111-112)

⑥⑦ は新聞記者が酔いから醒めた時の眼。⑥⑧ は Lee の姿を認めて緊張した Tommy の眼。Lee が家の中に姿を消すとホッとした眼付きになる。Temple も罪な娘である。この直後、Tommy は射殺される。⑥⑨ は Temple の傷の手当てに呼ばれてきた医者 of 眼。⑥⑩ の Tommy の眼といいこの医者 of 眼といい、共に Temple の姿と関わりがある。⑦① は Donald の容体について Margaret と話をしながら酔いを醒まそうと努める Gilligan の眼、⑦② は北軍の一隊に襲われた時の Joby の眼。その他の例には次のようなものがある。

⑦③ His eyes are pale as two bleached chips in his face. (AILD. 442)

⑦④ In the tall moonlight his eyes look like spots of white paper pasted on a high small football. (AILD. 494)

いずれも、Darl の眼に映る Jewel の眼であるが、時と場景の相違によって、同じ人間にとって一人の人間の眼は異なって見えるわけである。Darl は繊細な感受性の持主であり、後に気が狂ってしまうのだが、彼の眼はまた或る時には、Jewel の眼の中に、焰が二つの小さな松明のように泳いでいるのを認める。

... his eyes in which the glare swims like two small torches. (AILD. 498)

眼の輝きを torch に喩えている例は、既に ⑭ にもある。眼は輝くもの故、光に関係ある形容がなされても不思議はない。他にも次のような例がある。

- ⑦④ Her eyes look like lamps blaring up just before the oil is gone. (AILD. 370)
- ⑦⑤ Then his fierce eyes faded gradually, exactly as you turn a lamp down. (U. 284)
- ⑦⑥ ... she watched ... the golden pulsations of the flame in his eyes. (SP. 153)
- ⑦⑦ ... little point of fire in her eyes, ... (SF. 91)
- ⑦⑧ ... the eyes looked like two spots of dying daylight caught by water at the bottom of abandoned wells. (P. 82)

⑦④ は Peabody の眼に映る Dewey Dell の眼。「油が尽きる寸前にパッと燃え上るランプのような」とは、細やかな観察だ。⑦⑤ は Bayard の真意を覚って誤解を解いた時の保安官の眼。⑦⑥ は Cecily が Jones の眼の中に見るのであり、⑦⑦ は Benjy が Caddy の眼に認めるもの、火は Benjy にとっては生命の源になるもの。⑦⑧ は新聞記者の眼、彼はまだ酔っている状態であり、この眼は彼の後の立場をも暗示しているように受け取れる。次のような眼の描写もある。

- ⑦⑨ The land runs out of Darl's eyes, they swim to pinpoints. (AILD. 422)
- ⑧⑩ ... her eyes focussing into black pinheads at every sound of the stairs. (S. 276)
- ⑧⑪ ... she ... looked directly at him, her eyes calm and empty as two holes. (S. 82)
- ⑧⑫ ... she came to the woman, ... her eyes like holes burned with a cigar, ... (S. 110)
- ⑧⑬ ... her standing there with her eyes like the holes in one of these masks. (S. 194)
- ⑧⑭ ... his eyes did indeed look like holes burned with a poker in parchment diploma, some post-graduate certificate of excess. (P. 82)
- ⑧⑮ He tried to look her down but her gaze was impersonal as a dis-

section... (SP. 58-59)

- ⑧⑥ His yellow bodiless stare was as impersonal as the jars of yellowish liquid in the windows... (SP. 218)
- ⑧⑦ she looked at me then everything emptied out of her eyes and they looked like the eyes in the statues blank and unseeing and severe. (SF. 182)
- ⑧⑧ Her eyes began to grow darker and darker, lifting into her skull above a half moon of white, without focus, with the blank rigidity of a statue's eyes. (S. 287)
- ⑧⑨ Emmy's eyes were black and shallow as a toy animal's... (SP. 84)
- ⑧⑩ a little dirty child with eyes like a toy bear's... (SF. 144)
- ⑧⑪ ...his eyes round and soft as those prehensile tips on a child's toy arrows. (S. 375)
- ⑧⑫ Her glance was a blue dagger and her voice was like dripped honey. (SP. 95)
- ⑧⑬ ...their eyes like knives... (S. 182)
- ⑧⑭ If her eyes had a been pistols, I wouldn't be talking now. (AILED. 417)

⑦⑨は Dewey Deil の観察になる Darl の眼、⑧⑩は Popeye と Red がやってくるのを心待ちにしている Temple の眼、共に眼を凝らす時の描写である。一方、空ろな眼は hole に喩えられることが多い。⑧⑪—⑧⑭がその例で、⑧⑪、⑧⑫、⑧⑬はいずれも Temple の眼であり、彼女にこのような眼が多いのは、後に、一瞬、夢心地の裡に偽証することになる彼女にとって暗示的である。⑧⑭は酔醒め後の新聞記者の眼である。空ろな眼に通ずる何か非人間的な眼は、⑧⑤—⑧⑥のような描写がなされている。⑧⑤は Jones を見ている Margaret の眼で、彼女が彼を全く人間として相手にしていないことを示している。⑧⑥は Jones の眼。⑧⑦は Quentin が Caddy を殺す場面を夢想しているのだが、死を待つ Caddy の眼が空ろになっていると想像するのは、とりもなおさず彼自身の眼が空ろになっていることを示すものであろう。⑧⑧は Temple の眼。彼女は Red が殺されるだろうことを知っているのである。なお、生き生きしていない意味か、遊びの精神を表わすためか、玩具に喩えられる⑧⑨—⑧⑪のような眼

も見当る。⑧は Donald の少年時代の恋人で、今も彼を純真に愛してくれている Emmy の眼である。彼女は彼の死亡した日、悲嘆のあまり、儂くもまるで玩具のように Jones に弄ばれてしまう。⑨は自殺の当日、無心に Quentin に付きまとう幼女の眼で、彼に幼い日を回想させるが、この幼女は、彼が、まるで遊びででもあるかのような滑稽な幼女誘拐の容疑に問われる原因になる。

⑩は上告も断り、悠々と刑の執行を待っている Popeye の眼である。鋭い眼は武器に喩えられる。⑪は Cecily の眼で、眼付きと声の対照が巧みに描写されている。⑫は一人の娘に告白をさせようとして見詰める仲間の娘達の眼、⑬は Dewey Dell の眼の鋭さ——自分の秘密を匿さんがための——を Samson が描写しているのである。

次に、比喻ではなく、直接、色々の性格を眼に持たせている例を若干挙げよう。

⑭ Her eyes held a desperate coquetry. (SP. 151)

⑮ ... with ... a certain alert rapacity about his eyes. (S. 315)

⑯ He gloated, fondling her in his eyes with a slow sensuality. (SP. 99)

⑭は Cecily の、⑮は地方検事の、⑯は George Farr の眼である。

次に Faulkner が如何なる形容詞を眼や眼差しに付しているか、上例以外の例を context から外して簡単に列挙するだけにとどめよう。

(1) a blank, enveloping look (S. 316) / blank calculating gaze (S. 318) / a blasé eye (SP. 16) / a brief observing glance (SP. 203) / still circumspect eyes (U. 283) / cold, blazing eyes (S. 69) / curious eyes (SP. 182) / dark unhappy eyes (SP. 193) / dispassionate eyes (SP. 133) / a gaze dumb, inarticulate, baffled (LA. 348-349) / feverish eyes brilliant and voracious (U. 274) / a fierce glance (SP. 143) / fierce pale un-introverted eyes (U. 289) / frightened antagonistic eyes (SP. 64) / half-hidden eyes bright and malevolent (S. 301) / a haughty antagonistic stare (SP. 53) / hot impenetrable eyes (P. 90) / hot unreadable eyes (P. 90) / incredulous betrayed eyes (U. 275) / intent gaze (SP. 174) / interested stares (SP. 10) / eyes interrogatory, intent and sad

- (AILD. 491) / kind gaze (SP. 80) / keen gray glance (SP. 107) / eyes ; kind of dumb and hopeful and sullenly willing to be disappointed all at the same time (AILD. 485) / her eyes kind of blaring up and going hard like I had made to touch her. (AILD. 424) / light-caverned eyes (SP. 121) / pale bleak stare (U. 288) / eyes pale cold and urgent (P. 133) / pale furious eyes (S. 9) / pale outraged eyes (U. 284) / pale rigid eyes (AILD. 493) / eyes piercing and intent (S. 254) / puzzled eyes (S. 19) 他 / queer eyes of hisn that make folks talk (AILD. 426) / a quick, kind glance (SP. 86) / quiet thoughtful empty eyes (P. 76) / brown eyes quizzical, a little cold (SF. 164) / a sophisticated eye (SP. 7) / slow, friendly, unsmiling glance (SP. 146) / strong gaze (SP. 173) / thick, small, opaque eyes (S. 212) / an uneasy look (SP. 83) / warning glance (SP. 188) / weak, troubled eyes (LA. 126)
- (2) His eyes were bold and lazy, (SP. 171) / His eyes were a little bloodshot (S. 113) / His eyes were cavernous. (SP. 324) / her eyes were compelling (SP. 38) / Emmy's eyes were fiercely implacable (SP. 93) / they [eyes] were not intolerant but just intent and grave and . . . without pity. (U. 280) / His eyes were pleasant. (SP. 41) / the officer's gaze was puzzled and distracted. (SP. 21) / Virgil's eyes were also a pale, false blue. (S. 227) / His eye was round and bright (SF. 98) / . . . which [stare] was speculative yet not at all ratiocinative (U. 288)

Faulkner には、格言、定義じみた一般的 (general) な表現が少なくないが、次の例は、そのような表現に眼が使用されている。

- ⑨⑥ . . . the hot brown eyes seemed to snap and glare like a boy's approaching for the first time the aerial wheels and stars and serpents of a nighttime carnival ; (P. 7)
- ⑨⑦ . . . he became aware of her eyes, or not the eyes so much as the look, the regard fixed now on his face with that immersed contemplation, that bottomless and intent candour, of a child. (*Go Down, Moses*, Modern Library 版 357)
- ⑨⑧ But then, in the eyes all of them look like they had no age and knew everything in the world, anyhow. (AILD. 486)

⑨⑧は店員の眼に映る Jiggs の眼, ⑨⑨は Isaac 老人の眼に映る, Roth Edmonds の子供を生む黒人娘の眼であるが, 共に子供の性格に対する general な洞察も表わしており, ⑩⑩は薬剤師 Mosely の女性観を表わしている。

Faulkner には, 眼に複雑な状況を語らせる場合が少なくないが, 最後にこれらの例を断片的ながら幾らか示してみよう。

- ⑩① His eyes were bland, alert, secret, yet behind them there lurked still that quality harried and desperate. (LA. 377) His eyes watched her. It was as though they were not his eyes, had no relation to the rest of him, what he did and what he said. (LA. 378)
- ⑩② It was the same stare with which he might have examined a horse or a second hand plow, convinced beforehand that he would see flaws, convinced beforehand that he would buy. (LA. 124)
- ⑩③ ... looking back once, their gaze sweeps across us with in their eyes a wild, sad, profound and despairing quality as though they had already seen in the thick water the shape of the disaster which they could not speak and we could not see. (AILED. 443-444)
- ⑩④ ... the intolerant eyes which in the last two years had acquired that transparent film which the eyes of carnivorous animals have and from behind which they look at a world which no ruminant ever sees, perhaps dares to see, which I have seen before on the eyes of men who have killed too much, who have killed so much that never again as long as they live will they ever be alone. (U. 265-66)
- ⑩⑤ ... the coldly seething ancholite's eyes—the eyes of a fifth-century hermit looking at nothing from the entrance of his Mesopotamian cave—(*The Mansion*, Random House 版 p. 279)

⑩⑥は Lena とその子供に対面させられた時の Lucas Burch の眼の描写であるが, 彼の人柄を見事に凝縮して示すと同時に, Lena の, 作中での役割まで暗示していないであろうか. ⑩⑦は McEachern が初めて Joe を見る時の眼付であるが, 後の彼らの関係と Joe の境遇を暗示して余りある一節になっている. ⑩⑧は Darl が見る, 河を渡る時のラバの眼であるが, この一節で, 動物の本能的な感覚の鋭さを示すと同時に, まもなく棺が激流に呑み込まれるこ

とを暗示している。㊦は成人した Bayard の観察になるその父の眼であるが、Bayard の成長した様と、同時に、旧南部の code に対する彼の批判を示し、*The Unvanquished* の主題を暗示していよう。㊧は Mink Snopes の眼。「隠者の眼」とは、生涯の大半を牢獄に過さねばならなかった Mink の眼には誠に適しい比喻であろう。

第一作以来 Faulkner は、作中で“眼”に敏感であったが、次第に“眼”に対する言及は少なくなっており、特に傑作と見做されている作品では *Soldiers' Pay* におけるような煩わしいばかりの“眼”に対する注意 (look at, regard, stare, watch etc. の動詞も多いのである) がなくなっていることは注目してよいであろう。彼の“眼”が、表面的なものから一層深い処へ及んでいることを思わせる。また *The Unvanquished* は、既発表の短篇を集成して出来上った形式の作品であるが、各所に散在している“眼”への言及、描写は、深い処でその作品を繋ぐ一つの imagery となっており、また、夢を見ている状態から、夢から覚めた状態へと成長する主人公とこの作品の主題とに密接に関わりを持つ重要な要素となっていることが判るのである。

さて、語句はその sentence から、sentence はその context から外すと、意味が多少なりとも変容してしまうのが常である。籠から出すと青くなくなるのは、何も、メーテルリンクの「青い鳥」だけではない。青くなくなってしまう鳥ばかり並べて、青いのだ、青いのだ、と叫んできたようで気が引けるが、本稿は、Faulkner の世界における“眼”の役割の重要性を示そうとしたつもりである。「眼にもの言わず」とか「眼は口ほどに物を言う」とか、我が国の cliché があるが、Faulkner における“眼”は、口以上にものを言っているようだ、と言ったら言い過ぎになるだろうか。*The Sound and the Fury* 中に挿入された件の“眼”は、その作品の主題と深く関わり合う象徴的な重要な役割を果たしていることを先刻みたのであったが、あの“眼”は Faulkner の世界全体にとっても象徴的であったと言えるであろう。(1968.8.31)

註

- (1) 以下、本稿における数字は、引用の page 表示を意味する。 *The Sound and the Fury* は Modern Library 版 (旧版) を使用する。
- (2) *As I Lay Dying* は Modern Library 版を使用する。
- (3) *Pylon* は Signet Book 版を使用する。
- (4) *Light in August* は Modern Library 版を使用する。
- (5) *Sanctuary* は Modern Library 版を使用する。
- (6) 類似の空白は *The Mansion* の中にも見られる。Linda が Gavin に言う。「でも、あなたは私に できるのよ」 (“But you can me.”) (238)—Random House 版による。この後にすぐ、「彼はあからさまな言葉を使った…」とあり、我々は或る sexual な動詞を想像できる。
- (7) Melvin Backman, *Faulkner: The Major Years*. (Indiana University Press, Bloomington), p. 19.
- (8) *Absalom, Absalom!* は Modern Library 版を使用する。
- (9) *The Unvanquished* は Random House 版を使用する。
- (10) *Soldiers' Pay* は Signet Book 版を使用する。
- (11) *The Wild Palms* は Signet Book 版を使用する。
- (12) *The Reivers* の略, Random House 版を使用する。